

意した金は食いつぶしに当てるより外なく閉口したものである。

幸い、家族四人祖国の土を踏むことができたが、もう戦争はコリゴリである。

## 悲惨であつた満州の終末

山形県 阿部 とみ

広漠千里の地平線の彼方に沈む真紅の美しい落陽、忘れがたい大陸慕情になります。二十八歳の若さで夫に急死された私は途方にくれる暇もなのまま、当時満州の吉林市で師導大学で教鞭も取っていた従兄弟を頼って昭和十三年七月下関港から出港しました。実家の母に二人の子どもを託しての渡満でした。あの満州で悲惨な運命をたどるとは夢想だにしない渡満。吉林ではわずかの期間をすごし、知己の人の紹介で四平街の満州油化会社の責任者であつた老夫婦の家で住み込みの家事全般をする仕事につきました。

やがて航空燃料の補給対策から石炭の液化工場として昭和十六年五月に陸軍燃料廠の満州四平製造廠として接収され、工科系の大学卒の独身の技術将校たちの面倒をみさせてもらいました。十八年十一月には長男も中等教育を終えて同廠の軍属として就職しました。四平街は中満の小都市ですが、連京線をはじめ交通の要衝でもあつたので、関東軍の中樞機能をもつた軍都でもありました。

二十年四月頃から夕暮の四平駅に散歩に出た息子が、停車しても黙々として語らない大量の兵員を南下させる兵員輸送列車を目撃し、南方戦線の風雲急を告げる事態にあることを囁いていたようでした。

同居していた電気系の技術将校も自製の超短波の受信機で外国放送を傍受しては暗雲の中にあることを察知していたようです。息子も工廠の引込線には松根油を採る松の根が山積みされているのを見ては航空燃料の枯渇を知ったようです。機密のきびしい軍規の中で、ただ平然を装うみだした。

七月に入ると、根こそぎ動員された一般民間人が、

見るも耐えない兵装で中央公園などで暮舎生活をして  
いる状況が見られるようになりました。

八月十日の満州日日新聞のソ連軍ソ満国境を侵攻の  
大見出しに驚がくし、震えてしまいました。九日早晩、  
日ソ不可侵条約を破棄したソ連軍がソ満国境を怒涛の  
ように侵攻して、北滿はすでに大混乱の渦中にあるこ  
とが報道されたのです。伝え聞きでは、北隣の公主嶺  
市までソ連空軍部隊の爆撃があったことを知り、四平  
街は戦火の渦中から、まぬがれたようでした。狼狽不  
安の中に幾日かをすごし、八月十五日だったと思いま  
す。工廠の部隊員全部が本部営庭に集められ、炎暑の  
中で敗戦の詔勅をよく聞きとれなかったが、無念と、  
そしてこれからの不安の交錯する中で聞きました。

部隊で最も若かった息子達は、純白の上衣に白の鉢  
巻をさせられ、工廠の重要施設の破壊の決死隊員にさ  
せられ、無我夢中の中で水盃を交わし、遺髪として準  
備したものを胸中にしました。幸いにも、この決死行  
動は部隊長命令で不発に終わったことを聞き、大きな安  
堵をしました。

やがて、今までの植民地支配的な日本人の感覚の中  
で差別され屈辱感に耐えてきた満州人、朝鮮人の憤ま  
んは一挙に爆発して、日本人を侮蔑し横暴な行動を起  
こし始めました。

満州国の建国発展のために、日本民族の果たした貢  
献度は計り知れない大きなものであったことは今でも  
信じています。しかし、日本人の満州人に対する差別  
行為は日常茶飯事であったことを忘れてはならないと  
思います。日本人も日僑俘虜居留民の組織をして自己  
防衛にとめたが特に打つ手はなかったようです。や  
がて進駐してきたソ連軍に、日夜怯える日々が続いま  
した。その時はすでに陸軍官舎街の将校達は全員ソ連  
軍により拉致されて工廠の丘の上の揚木林の戦車隊跡  
に収容されていたので、官舎街の防衛、見張りは残さ  
れた男性老人達に頼らざるを得なかったようです。  
終戦の四月に渡満したばかりの娘には断髪や、男装  
をさせて、通報のあった時は天井裏に隠れさせること  
にしていた。

内地から同行したばかりの将校の新妻の中には発狂

し、自らの命を絶った悲惨をも目のあたりにしました。終戦当初は、食糧、燃料等については陸軍糧秣廠からの配給によってなんとかしのいだが、それを断たれてからは、自ら奔走する以外にありませんでした。持っている衣類や貴重品を満鮮人と物々交換して食糧にしたり、材料を彼らから買って即席の餅屋さんをはじめたり、それは筆舌にはつくせない、辛酸をなめてすごしました。

二十一年には国府軍と中共軍の衝突による激しい市街戦の銃撃もありました。平定した中共軍は軍律がきびしく、統制がとれていたようです。

二十一年七月、苦難の車中生活に耐えながら、女だけの同居家族四人は命びろいをして錦西のコロ島に着きました。故国の博多港に着いた時は、抱きあつて感涙にむせびました。たった一つのリュックサックを背にして、故国の土をふみましました。私と娘はとりあえず母のいる私の実家に帰りました。すでに実母はもうろくしており、ここには住めないと判断して、ほどなく、亡夫の実家に居候の身になりました。駅前旅館だった

ので、戦後の開墾ブームの技術者の宿泊などで忙しく、早朝暗くから夜遅くまで居候の気疲れの中で立ちづくめで働きました。あの肉体的な労苦が現在、変形性関節症（両膝）を誘発して終生の苦痛になり、それに耐えております。二十二年六月、息子がシベリアからの帰還を機に、旧陸軍の兵舎を急改造した板一枚の引揚者寮での生活もしました。戦後四十六年、引揚者が体験した辛酸は筆舌にはつくしえませんが。

## 満州浩良河開拓団の思い出

宮城県 佐藤 まつよ

昭和十九年四月、北海道より大秋馬産開拓団として満州三江省に入植することになった。牛や馬を持って行く開拓団は初めてだったので大変張りきっていた。本間寛団長以下二十戸先遣隊として空襲の真只中を不安ながらも出発した。鉛色の海はすごく荒れていて、立っている人もご飯をたべている人もいなかった。